

研究発表

和歌と時調の植物素材に関する考察

——万葉、古今、新古今集を中心に——

李 相 傑*

It is a common phenomenon that nature takes part in the field of literature, and Japanese literature has pioneered an unique genre in that field.

This report treats the manner of contemplation concerning nature-especially plants-in Japanese literature. Generally the natural world is used to explain two defferent ideas. One is the intuitive concept or pure feeling concept, and the other is the moral concept or artificially valued concept.

In Japanese literature-especially in Manyōshu and the other Wakas-, plants take part in it as an intuitive creation, in other words the poets of Manyōshu and the other Wakas had found the beauty of plants not through their moral significance but through their original beauty without adding any moral explanation.

In this rept I have compared the Shijo plants-meaning the plants which appear in Shijo Anthology-with Manyōshu plants.

*E E Sang Up [現職] 慶尚大学校師範大学助教授

I am afraid of being criticized because both poems were written in different periods of time. I beg you to pass over this for the moment.

The result of study hinted to me that we can classify the plants of both Anthology into the following three groups.

The 1st group, which is treasured by poets of both Anthology. For example, pine and palm blossoms.

The 2nd group, which is treasured by Manyōshu poets only. This group is treated very coldly by Shijo poets. For example, bush clover, pink (a belongsto genus partrinia), common reed grass, lawn grass. Above all, the bush clover is cited in Manyōshu more than 137 times and acquired the 1st rank in frequency of apperance. But in Shijo bush clover is nearly forgotten and is eited only twice as fire wood and symbol of graveyard tree.

The 3rd group, which is treasured by Shijo poets. The plants of these group are usually transmitted by Chinese literati, so that the plants appear in Chinese idiomatic form, for example, green willow, heaven peach, red lotus, cold chrisanthemum, white duckweed, red knotweed, ...and so on.

Without hesitation, I would say that the poets of Manyōshu has planted the literary plants deep into Japanese soil, and the successors of Waka always put to practical use according to their natural and social circumstances; the quintessence of Manyō mind found in many kinds of Manyō plants is being inherited to the Japanese Waka like gen of genetics.

序 論

「万葉集の名義としては〈(万)の言葉(ことのは)の集〉と、〈万世の集〉(遠い昔からの歌を収め、永久にさかえてゆく集)の意とする2説が有力である。」と平凡社の百科事典が、万葉集項を書き出しています。まさにその通りだと思います。『とはにさかえてゆく集』であることは、万葉集以後のすべての詩歌が、その影響を受けていることから正しい定義だと思われます。すこし誇張すぎるかも知れませんが、日本文化全般の基底をなしている何ものかが万葉集の歌風の中にはあると思います。それですから永久に汲み尽すことのできない泉にたとえることもできます。

本稿では万葉集という日本古代民族の築き上げた文学ピラミッドに、それこそささいな局部的照明をあててみました。すなわち万葉歌人達の叙情媒介の手段として詠み込んでいる植物素材に焦点を合せて考察して見ました。万葉植物自体に関する研究は非常にすすんでいると思いますが、ここでは一外国人として、万葉集を詠み解いて行く過程に感づいたことを韓国の詩歌、特に朝鮮王朝の時調と比較しながら整理してみました。

朝鮮王朝の詩歌(時調)とその植物素材について

朝鮮王朝期に形態の完成に達したと思われる時調はその発生を高麗期の末期に求めることができます。時調という名称が歴史の文献にあらわれるのはそれほどながくはありません。申光洙の〈石北集〉《関西楽府》其の十五に〈一般時調排長短……〉と始めて記録されているのでくわします。だから朝鮮王朝の英祖朝(A.D. 1724~1776)から始められたものだといえるのです。本稿では朝鮮王朝期の詩歌を代表する3章45字内外で構成される、この定型詩を植物素材検討の対象にえらびました。郑炳昱氏の時調文学事典に記載されている2376首が朝鮮王朝期に詠まれた全時調にあたります。作者総数は267名でその中1217首が作者名を残しています。最も多くの作品がのせられているのは金寿長(海東歌謡の編纂者)で122首、又1人1首を残しているのが119名に及んでいます。作者の大部分が官吏出身の儒子であり、又彼等を

相手に宴の伴をつとめた妓生の数も多くあります。時調にあらわれる植物素材の総種類は81種、総頻度数は565です。総歌数が2,400余種ですから、後述する万葉集にくらべればその歌数を考慮するとしても随分の差がみとめられます。

時調植物で最も頻度数の高いものをいくつかえらびまして、その引用状況を調べたのが下表です。

順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計	備考
植物名	松	楊柳	桃	竹	梅	蓮	梧桐	梨	蕨	葦		
頻度	80	75	52	40	31	21	17	14	12	9	351	

まず、松の場合、純粋韓国語（ハングル）で表記されているものよりは、漢字熟語として記載されているのが目につきます。たとえば〈落々長松〉〈松竹〉〈松関〉〈松根〉〈松檀〉〈松林〉〈松柏〉〈松声〉〈松涛〉〈松岬〉〈松影〉〈松亭〉〈松窓〉〈松風〉などであり、この中でも最も頻度数の高いのは〈松風〉であります。そしてこれらの大部分は、詩歌の主題とはあまり関係がなくもっぱら補助的素材としてつかわれているのが多いです。松そのものの自然的美が叙情の媒介役をするのではなく生態的特徴、即ち常緑の操を志士の心情にかけあわせて詠みあげているのが、殆んどであります。たとえば、端宗哀史で有名な死六臣の一人成三問の節義歌などは恰好な例といえます。

1665

이몸이 주거가서 무어시 될꼬하니

蓬萊山 才一峯에 落々長松 되야이셔

白雪이 滿乾坤할제 独也青々하리라

作者；成三問，

この身は死んでも魂はほろびず、蓬萊山の第一峯にりりしくそびえ立つ喬松となり、白雪が天地をおおう時一人青々ならんという意のものです。(参考までに、この時調は小学校の教科書より大学の教材に至るまでかならずのせら

れるものです。)同じく死六臣の一人俞應孚も次の様な時調を残しています。

간밤에 부던바람에 눈서리 치단말가

湛々長松이 다기우러 가도매라

하믈며 못다핀곳이야 날러므슴하리오

61 作者；俞應孚、

昨夜の風雪まじりの風に落落長松がみなねこそぎたおれた、いわんやいまだ蕾同然の(私)なんか、たまったものではないという意味で政変にまきこまれて、死をえらぶ志士の心情を隠喩したものです。

1801 長松이 푸른것헤 桃花는 불거잇다

桃花야 자랑마라 너는 一時春色이라

아마도 四節春色은 슬뿐인가하노라

作者；不明、

出典；東歌171

日訳：松は青く 桃花は 紅

桃花よ おごるな 君はつかのまの春

常時春色は 松にかぎるのだ

この時調なども、松と桃のたくみな色彩的コントラストが詠みこまれたのかと思えば、すぐさま次章でこの兩植物の生態的特徴を作者の儒教的倫理の軌範に照応させ、観念的に処理してしまいました。勿論、松そのものの自然的美がたくみに詠みこまれたものものないではありませんが、ごく少数に限られています。李栗谷先生の〈高山九曲歌〉の第一曲を飾る〈冠巖〉の主題詩は、

1729

一曲은 어드메고 冠巖에 햇빛쨌다

平蕪에 내거돈이 遠近이 그림이로다

松間에 綠樽을녹코 벗온양 보노라

作者；李珣、

日訳：一曲はどこであろうか 冠巖に 日が射すのか

草原の霧が晴れるや 遠近在絵のようにくりひろげられる

松間に芳酒の樽を据え 友が来るがの如く見入る。

時調において松は、木の象徴、操の象徴としてとりあつかわれています。時調にて、松が頻度1位を占めているのは、朝鮮王朝の朱子学の理念とよくマッチすることに主な原因があるのです。

松の次に頻度の大きいのは柳であります。柳は〈楊柳〉〈緑柳〉として現れています。〈緑楊春三月〉は熟語化され、春の枕詞のようにつかわれています。日本の和歌で柳と桜がpairとして熟しているように、韓国の時調では、柳と桃李がそれに該当します。又梅に鶯は、楊柳に黄鶯で対応しています。

492 緑楊春三月을 자바매야 돌거시면
센머리 섯바내여 찬찬 동혀 두련마는
올해도 그리못하고 그저 노화 보내거다

日訳：緑楊の春三月を 捕り抑えて おきたいのだが
白髪を抜いては 縛り束ねて おきたいのだが
今年もついやれず 年をとらしてしまうのか

次は桃の花が頻度順ですが、花だけをとりあげるとしたら桃が初めてあらわれます。松、柳は花をつけていません。万葉集、古今、後撰、新古今集を通して花をあげる場合、万葉の萩をのぞいては、桜が首位を占めています。桜はいわば花の代名詞としてつかわれています。花名があげられていない場合はほとんど桜を暗示しています。時調植物では、桃がそのような役目を果たしています。次の時調は、桃の花が占める時調における地歩をよく示してくれます。

655 桃花는 훗날리고 綠陰은 퍼져오다
끄너끄리 새노래는 細雨에 구을거다
마초아 羞드러 勸하랴제 淡粧美人오도다

日訳：桃の花びらは 飛びまがい 緑陰はひろがりみつ

うぐいすの鳴声は 細雨の中に ころがりゆく

丁度 杯を すすめんとするこの際まわ 淡粧美人があらわれた

春には桃の花だけが咲くとは限りませんが、ここでは桃の花で春の花すべてを代表させています。朝鮮王朝の時調人達には、春となればあたりかまわず咲き乱れる桃の花が、彼等の時調興を目覚めさせたからでしょう。楊柳、桃李、黄鶯、細雨は盛春を詠みめでる、時調制作の季語のようなものになりました。和歌では、鶯は梅と番をなしてあらわれる早春の鳥ですが、ここであげられる黄鶯は黄色の高麗鶯のことで、この鳥はずっと春が深くなって初夏先に鳴きだすのです。

2226 風霜이 섰거틴날의 갓핀 黄菊花를

銀盤의 갓거다마 玉堂으로 보내실샤

桃李야 꽃이론양마라 님의 뜰들알과라

作者； 郑徽（松江）

日訳：風霜が冷い或る日 咲きたての黄菊を

銀の盆に盛って 玉堂（弘文館）に たまわれた

桃李の輩よ 恥じ入りなさい 君（主）のみごころを察して余りある

桃李は花の代表格ではあるが、やはり寒菊の操に較べれば、いやしきものになってしまいます。いくら自然的美をそなえていても、時調歌では、生態的に儒教的狷介の特徴を欠けばいやまれるのです。桃李の豪華な美が移り気の軽兆浮薄な輩にかけられてしまいます。朝鮮王朝の時調にあらわれる植物素材は、ほとんどこのような観念的、倫理的隠喩の資料として色分けされて引用されています。四位の竹も、五位の梅も、六位の蓮もやはり、その生態をかながみ、人間社会の倫理的軌範に照応させ観念的に詠みあげられてしまうのです。郑炳昱氏の時調文学事典には2376首が載せられていて、万葉集の4,500余首に比すれば、ずっと少ない数ではありますが、万葉集の植物素材が175種に対する81種止まりは私達の注意をひきます（時調と万葉集との

製作時代の差は500年近くです)

※時調と万葉集の植物素材の出現頻度表は補註を参照して下さい。

次の表は〈時調集〉(中央印書館発行)を対象にして、郑炳昱氏がその頻度を調べたものです。この〈時調集〉には1648首の時調がのせられています。この〈時調集〉の中で花がよみこまれているのは174首、(この中、花の名をあげているのは108首です)でありました。

順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	
花名	桃花	梅花	菊花	梨花	落花	李花	蘆花	蓮花	海棠花	牡丹	蓼花	石榴	杜鹃花	冬柏花	蘭花	躑躅	向日花	豨薟	石竹花	棉花	稻花	
頻度	26	23	19	13	12	10	8	6	5	4	3	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	142

この中、落花(5位)をのぞけば20種の花が見出されるだけです。

また、郑炳昱氏は韓国で殆んど漢文教育の教科書のようにつかわれてきた〈古文真宝〉前集の漢詩の中から、植物(花だけ対象)素材を調査して、次の表を作っています。

順位	1	2	3	4	5	6	
花名	桃花	梨花	梅花	菊花	蓮花	海棠花	
頻度	17	11	6	5	3	2	

上の表は前記の〈時調集〉のそれとよく重なりあっていることがわかります。ここでは、花だけを対象にしていますが、植物一般をとる場合、松と竹が最上位に入るわけです。それで、松、竹、桃、梅、菊は、時調の植物素材として最も出現頻度の高い植物群であることがわかります。しかし、わが時調人達が果してこの花を直視して、その自然的美を叙情の媒介としてとりあげたかは疑わしいことです。上記の花は四君子の中の蘭をのぞいてみな包含されています。結局、朝鮮王朝の時調植物は中国漢詩の素材がそのまま移り渡っているのです。

万葉集とその植物素材について

万葉集に詠みこまれている植物素材は175余種で、その頻度数は1,478になっています。(補註参照) 日本では花といえば、その花をつける茎も葉も一諸にふくまれていることが多いことを前置きしておきたいものです。花と葉、茎などが、どんな具合に調和されているかが、かなり重要なポイントになっているようです。先ず万葉集に引用されている植物を頻度順位で20種えらびだしました。

順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
植物	萩	梅	松	藻	橘	葦	菅	芒	桜	柳	茅	菊	撫子	稻	卯花	紅	菰	藤	山吹	葛
頻度	137	119	71	69	66	47	44	43	42	30	27	26	26	26	23	23	22	21	17	17

萩が、群を抜いて、首位を占めているのは奇異なことに思われます。梅や松、竹ならいざ知らず、萩が首位を占めるようになったのには、たしかに、なにかの理由があるはずです。又、竹が総名として頻度14になっていますが、時調人達の竹に対する一方的傾倒ぶりとは対照的です。萩は日本の山野だけに自生する特産植物ではありません。大和三山一帯はいうまでもなく、春日野一帯の野山を歩けば萩と葛が乱れ茂っているのを眺めることができます。

しかし、それほどの萩なら、ソウルの周辺山地、即ち北漢山又は南漢山麓にも非常に殷盛に咲きみだれています。それなのに時調人達は、萩には殆んど関心を示していないのです。やっとなんぞと珍青出典の辞説時調の一首に、薪材として詠みこまれているだけです。万葉集に萩が一位を占めていることにたいしては、日本の学者達もあまり注意を向けていないようです。しかし、共通の植物分布の地域に住みながら、両国詩人達が正反対の反応を示していることは不思議です。〈萩〉〈萩の花〉〈萩の下葉〉が、万葉歌人達の詩情を刺戟する、何かの要因があるように思われます。

山上憶良は、萩、尾花、葛、撫子、女郎花、藤袴、朝顔(桔梗)をかぞえあげて、秋の花の代表にしていますが、この中で萩が先ず第一番に指折られてい

るのは偶然ではないようです。

源氏物語でもこの萩は、贈答歌の中でたくみに活用されています。平安貴族達の繊細優雅な叙情のみちしるべとして、大いに活用されているのです。桐壺の巻でも鞠負の命婦にそえ送った帝の贈歌に

宮城野の露吹き結ぶ風の音に 小萩の上を思ひこそすれ

と記しています。幼な皇子の体を小萩の枝に比喻し、その運命を萩の上葉に結ぶ白露の玉にたとえる、父親のわが子を思う哀々なる心情が、実にたくみに表現されています。即ちこの贈答歌にでる露の玉、秋の風、萩の細枝は、源氏物語全篇を貫く不可欠の三大要素とも云えるでしょう。〈もののあはれ〉の解明もこの要素を手づるにすることができると思います。桜もそうですが、万葉人が萩の美を発見したことは特記すべきです。どんな漢詩も萩を正面に打ち出して賞美したものには、あまりでくわしていません。〈萩と鹿〉〈萩と雁〉〈早萩〉〈萩の古枝〉〈萩の上葉に置く露〉〈朝露になびく萩〉〈色づく萩の下葉〉〈花問ふ牡鹿〉〈高円の萩〉〈萩凌ぐ牡鹿〉〈鹿の胸分け行く萩原〉〈萩が花散る〉などの、日本文学独特のきゃしゃな美のパターンが、万葉時代に深く根を下し始めたと言えます。特に露と萩は万葉歌人達によって発見された美の極致とも云えます。

2173 白露を取らば 消ぬべしいぎ子ども

露に競(きは)いて萩の遊びせむ

2171 白露の秋の萩とは 恋ひ乱れ

分くこと難きわが心かも

〈枕草子〉でも萩の美しさは、そのまま受け継がれています。

『萩いと色深う、枝たをやかに 咲きたるが 朝露にぬれてなよなよと ひろごりふしたる、さ牡鹿のわきて立ち馴らすらむも心ことなり。』(67)。

又 〈徒然草〉でも

【……草は山吹、藤、杜若、撫子、池には蓮、秋の草は、萩、薄、きちかう、萩、女郎花、藤袴、しをに、われもかう、かるかや、りんどう、菊、黄菊もつた、くず、朝顔、いずれもいと高からず、ささやかなる、壇に繁からぬよし……】と記しています。萩の美は、そのままひきつがれて近代俳諧においてもしばしば引用されます。

白露も こぼさぬ萩の うねりかな

作者：芭蕉

いますぐにもはねかえりそうな萩のうねりと、その上葉に置かれている白露の玉は、前記の源氏物語の贈答歌に通う所があります。

萩散りぬ 祭もすぎぬ 立仏 作者：一茶

待ちこがれていた祭の太鼓のひびきも、今はもう鳴りしずまり、寒くて長い山村の冬を迎える晩秋の寂莫たる風景が、花と葉を散らしてしまった、ほっそりとした萩の小枝を媒介に美しく浮かびあがります。

萩の花は万葉時代よりずっとひきつづき、日本詩歌の寵児として咲きつづけ、今でもときたま民家の垣根づたいに萩が植えこまれたのを見る度に、遠く万葉の世界を憶い出さずにはいられません。

次に梅の花についてですが、

万葉集では、うめを〈梅〉〈汗米〉〈鳥梅〉〈宇梅〉などと記し頻位2です。中国からの渡来植物にたいする関心が大分働いていたかも知れませんが、しかし、梅自体が日本人の好みにマッチする植物的要素を具えていたからだと思われます。しかし万葉歌人達が梅の花をめめているのは中国人、又は韓国人のそれとは若干趣を異にしています。特に時調人達は梅の花が生態的にそなえている早咲きとその枯淡な枝ぶりが、何か君子の狷介趣味と相容れる点があるためでした。

氷資玉質이여 눈속에 네로고나

가마니 香氣노아 黄昏月을 期約하니

아마도 雅致高節은 너뿐인가 하노라

作者；安玟英、出典；花樂 95

日訳：氷のようにさえて美しく 玉のようにきれいな肌の君

しずかに香りを放ち たそがれの月を待つ君

とまれ けたかき君の操に誰が競い争そわん

梅花 넷등걸에 몸철이 도라오니

넷뛰던 柯枝에 피엄죽도 하다마는

春雪이 乱紛々하니 필뎀말동 하여라

作者；梅花（伎生名）. 出典：珍青290

日訳：梅の古株に 春が訪れて来た

去年の花枝は 今年も花を着けるはずだが

春の雪がこんなに散らついては 果してどうなるだろうか

梅花は作者の芸名（伎生名）であり、春雪は恋仇の伎名である、春雪があんなに媚び付きまわっているからには、この私（梅花）は咲き出る機会にめぐりあうだろうか、と云う意味です。

しかし万葉の歌人は、梅そのものの自然的美と、香り高さをすなおに詠みあげて、上記のような隠喩はあまり用いていません。

818. 春されば 先づ咲く宿の梅の花

ひとり見つつや春日暮らさむ

837. 春の野に鳴くや鶯なづけむと我が家の園に梅が花咲く

1904. 梅の花しだり柳に折り雑へ花に供へば君に逢はむかも

843. 梅の花折りかざしつつ諸人の遊ぶをみれば都しぞ思ふ

1640. わが丘に盛に咲ける梅の花残れる雪をまがへつるかも

上の歌からは、梅の花、即ち土中に根を下ろしている自然のままの梅の木を作者が直視しながら詠みあげているのをうかがい知ることができます。万葉植物の中ではもっぱら実用的側面から歌い込まれたものも相当ありますが、それをのぞいても4,500首の中に175余種類が出現するのは、おどろくべき事に思われます。

万葉の詩歌が飛鳥、藤原、奈良時代をfashionとするならば、約130年間の作

品ですが、今から1,200年、1,300年も前にこのように多くの植物種類が詩歌の素材として、正確に弁別され活用されたということは、ほとんど奇蹟的です。E. C. Seidenstickerさんも次のように述懐しています。

“The incident illustrates again the truth about the Japanese view of nature that is present in dictionary definition of HANA ; that it is specific and detailed. In the very earliest graphic representation of nature there are stylized trees which could be almost any foliage-leaved variety, but from the twelfth century down at least to the nineteenth scarcely a single unidentified branch of tree or blade of grass is to be found in Japanese painting. In the twelfth century Gengi scrolls, every details of Murasaki’s garden as she lies dying is specific and realistic.” (日本学報第4輯、1976、韓国日本学会)

これは、日本人が自然科学的観察力に秀でていたことを証し立てるものではありません。豊饒多彩な日本の自然の中に生活していた万葉人達は、彼等が弁別し得るだけの微妙な文学的感受性のとぎすましが、すでになされていたことを裏書きすると云えます。

2270 道の辺の尾花が下の思草 今さらになど物が念はむ

これは作者を芒に寄生する思草（なんばんぎせる）に置きかえ、もっぱら心と身をあなた即ち宿主の芒に委ねていますのに、今更何の他心がありましようか、と云う一種の丹心歌に属するものと思いますが、このなんばんぎせると宿主の芒の関係をよほどするどく観察していない限り、このような発想には及びがたいものではないでしょうか。芒と思草の一蓮托生の生態のからくりをよくも見抜いているのに、おどろかされます。

2308 雁がねの寒く鳴きしゆ水茎の岡の葛葉は色づきにけり

葛葉の色づくのを見取ることのできたのは万葉歌人にだけ許された感覚ではないでしょうか。自然の植物にたいするかぎりない愛のまなざしが葛の色づく下葉を美しく見立てることができるのです。

1444 山吹の咲きたる野辺につぼ菫、この春の雨に盛なりけり

つぼすみれの名前をちゃんと呼びさすことによって上歌の情趣は、今一段とさえてきゃしゃな美しさを四方に放つのです。つぼすみれのかわりに、春の花とか、花一般を莫然と詠みこむとしたら歌の情趣は稀釈され、観念化され、とりとめのないものになってしまうでしょう。

2110 人皆は 萩を秋と云ふよし吾は尾花が末を秋とは云はむ

山上憶良は、秋の七草をえらぶにあたって、この尾花を萩の次によみあげています。今日の日本人一般のこの花にたいする傾倒ぶりにもおどろかされます。時調歌人達は、この植物素材にたいしてはほとんどふりむきもしていません。郑松江の将進酒辞の中に共同墓地のイメージを強調するために、この草が写用されているばかりです。

2186 秋されば 置く白露に吾が門の浅茅が末葉 色づきにけり

万葉集ではこの草が27首にあらわれています。浅茅の末葉の色づきと白露の配置は秋の凋落を淋しく、美しく詠みあげるためには最適の素材と思われませんが、時調文学では茅草そのままにはつかわれず、かならず合成語として、茅屋、茅舎につかわれています。万葉集では浅茅としてよく合成されますが、茅草の生態をいかに描写した熟語だと思われれます。若干やせぎみの酸性赤土の丘陵地帯にまばらに群生する浅茅が原に、私達はよくでくわすのであります。

2189 露霜のさむき夕の秋風にもみちにけりも妻梨の木は

万葉集では梨の木が三首登場しますが、その花をめでののはなく、その葉の色づく様をうたっています。梨の木の葉のもみちというものは、私達には何のみばえもしないものに映ります。暗い朽色にいろずく梨のもみじに、すばやく目をむけたことも、万葉人特有の詩情かも知れませんが、後日この花が中国人の詩歌によって、それこそ不相応の彩色がほどこされ、渡来してきますが、結局和歌の作者達にはあまり歓迎されずに終わりました。時調人達の傾倒ぶりとは対照的といえましょう。〈枕草子〉などでも、

【梨の花、よにすさまじきものにして、ちかうもてなさず、はかなき文つけなどだにせず。愛敬おくれたる人の顔などを見ては、たとひにいふも、げに、葉の色よりはじめて、ありなくみゆるを、もろこしには限りなきものにて、ふみにも作る。なほさりともやうあらんと、せめて見れば、花びらのはしに、をかしき匂ひこそ、心もとなうつきためれ。……】(37)のように記して、あまり讃辞をおくっていません。万葉人にしても、平安朝の詩人にしても、詩歌の植物素材を唐の文人達のみがきあげたそのままのイメージでは受けついでいないようです。梨の花びらの先に黄色めいたものが、うっすら染まっていることを記しているのにおどろかされます。

1972 野辺みれば瞿麥の花咲きにけり吾が待つ秋は近づくらしも

万葉集では、この花が〈石竹〉〈奈泥〉〈牛麥〉などといろいろ表記されて、26首にあらわれています。山上憶良の七草の中にも詠みこまれていて万葉人のこの花に対する愛着を伝えてくれます。日本女性を大和撫子にたとえていたことを私も憶えています。やはり古代万葉人の遺産をそのまま受けついでいる証しと云えます。万葉人達が草木花鳥の変貌の中に季節の移りかわりを敏感に捕えていることは彼等の詩歌の中でうかがい知ることができますが、古今、新古今の歌人達もこれを受けついで、それこそささやかな一輪の草花から季節の温度を機敏に測りとっているのには、再度おどろきます。

2096 真葛原なびく秋風吹くごとに阿太の大野の芽子が花散る

萩にたいする万葉人達の一辺倒的な愛執にたいしては、すでに書きましたが、このあまりふくよかとはいえない萩の花は、何か日本人好みの繊細な豪華美を秘めていることはいなめません。万葉集における萩の花傾倒は日本文学、ひいては日本文化全般を支える本質の一角を暗示する契役をはたしているかも知れません。幽寂と豪華、繊細と強靱など一見相互背反的な美的要素が、同居することのできる足場の役を果しているようにも思われるのです。

2114 手にとれば袖さへ匂ふ女郎花、この白露に散らまく惜しも

〈女郎花〉〈美人部師〉〈佳人部為〉などいろいろな表記がつかわれています。万

葉集には12首ばかりでています。韓国の秋の野山はこの花で、全山黄金の粉をふりまいたような壯観を呈するところがよく見受けられます。しかし、この花が時調の素材としてつかわれていません。その名前さえ知っている人はすくないようです。この花もやはり、山上憶良の七草の中に詠み込まれています。女郎花はその花の姿はもとより、その香りさえあまりよくありません。たまたま腐敗した醤油の匂がするというので、中国では敗醬とよばれているようですが、実は、おとこしえとの錯覚からで、おみなえし自体はそれほどくさい匂はしないようです。ひよろひよろと伸びた繊細な茎とか、末広がりやを連想させる傘状花序のひろがりや、何となくきれいな少女の姿を映し出しているような草花です。

万葉歌人達の詩情を奏で立てた植物素材の目録表は今日の日本人のそれに合わせてみても、大したずれはなさそうに思われます。その大部分が繊細幽寂の情を醸し出す形態の植物群であります。山上憶良が指折り数えあげた七草がその代表格といえるでしょう。細長いきゃしゃな茎が無数、白い風にゆらぐ秋草の原は、金線、銀線が織りなす交響楽にもたとえることができます。日本人好みの花の特徴はたしかに色よりも、その線にあるようです。ゴッホのえがいた日向花は、そのきらびやかな色とマッスにあります。しかし、日本画の生命が線にあるように、七草の美もひいでは平安王朝文学の美もこの七草がかもし出す線にあるように思われます。この美しい七草の美は連綿と引き継がれ、日本文化を支えている大きな柱の中のひとつになっているようです。花の重さを支えることのできる最低の細い花茎は、日本の家具建築工芸にひきつがれ、桂離宮に見るその優雅な調度品を作っているように思われます。ぜい肉をすべてそぎとった〈骨の美〉を作りだしているのです。

結 論

万葉集が、日本の詩歌文学における植物素材の源泉地の役割を果たしていることが、指摘されました。万葉集が180余種の植物素材をのせていることも本論で述べました。又その植物素材は、作者の主観的偏見で歪曲されることな

く、大地に根を下ろしたままの姿で素直に詠みこまれました。それ故に、万葉集に引用される植物の大部分は、読む人にそれだけの親密感をあたえるのです。このような事実は、万葉和歌の男性的、直情的、開放的素朴さの縁由の一翼をになっていると思います。しかし、これが古今、新古今和歌に受け継がれる過程に歌中の植物素材は、土から掘りおこされて、鉢植えにされ盆栽化されるのです。こうすることによって、自然そのままの素材は、今一段と樹型をととのえ、より美しく、より文学的評価をかちとる結果となりましたが、詩歌そのものの活力はかなり削ぎとられたこともみのがすことができません。万葉人達と自然とのへだたりなき、又、広汎な交りは、古今、新古今時代に下ってはずっとせばめられましたことは、後者の歌中（万葉以後の古今、後撰、新古今集）に登場する植物素材の種類が、激減したことで容易に計り知ることができます。それでも、万葉歌人達が播きつけた自然観は、枯れ渴くことなく、くりかえし芽を萌きかえし、俳諧の連歌、発句、現代和歌へと生き伸びているのです。

今日、和歌・俳句にたいする色々な批評や定型詩としての限界が挙論されていますが、かえってそのもっている弱点故に日本の民衆詩として、定着する機縁を内包しているといえないこともありません。日本民族の基本リズムと云える五・七調と万葉この方着実に育てつづけて来た共通の植物素材（素材一般をもふくめて）故に、民衆の共通感情を汲みとり分かち合うのに最適の器となっているのではないのでしょうか。そのことは万葉集を源とする正統派格の和歌とその傍系といえる俳句が、日本の津々浦々に根を下ろし、数知れぬ程の同好の集いを殖しつづけていることから察せられます。

これに比して、韓国の時調は、その英・正祖時代(1724～1800)をピークに衰微の道をたどり、更に韓日合併を境にプツリととぎれてしまいました。日本官憲当局の強制的干渉も主な原因といえますが、それだけとはいえないようです。勿論今日でも、若干の（それこそ極少数の）時調歌人達が活動していますが、とても民衆詩としての役割を果たすところではありません。新体詩、

自由詩、散文詩などの波に呑みこまれたことも事実ですが、その根元的理由は、時調自体の栄養源が当初から存在していなかったことに原因をもとめるべきでしょう。即ち日本の万葉集に該当する〈三代目〉の隠滅が決定的であるといえます。本論で指摘しましたように新羅郷歌は、仏教的発願が創作の契機となっていますので、殆んどが仏徳頌調になっていました。それが高麗朝後半期より仏教の腐敗で毒民害邦の声が高くなるにつれて、あたらしい指導理念として朱子学の抬頭を促し、この新思潮と時調は相互にいいし、排仏崇儒を建国理念とする社会的背景のもとで、今一度時調は、観念的儒教理念の造形に貢献する儒者達の余技におちぶれてしまうのです。時調は人生詩、政治詩として自然と袂別するのです。それ故時調に登場する植物素材は、土中に根を下ろしているものではありません。中国文人により、永い歳月をかけて育てあげられた既成の文学植物が、そのまま李朝時調人達の叙情の媒介物として機械的に借用される結果となりました。時調が民族の基本リズムである三・四調の上に立ちながら民衆詩として定着することができなくなったのも、そのことによるのでしょう。

討議要旨

ベルナル・フランク氏より、韓国で好まれる梨が日本では枕草子の記述の例などを示してあまり好まれていないと述べたが、後撰集の撰者は梨壺の五人といわれたりしている。そのような事から考えれば和歌ではそれ程梨は嫌われてはいなかったとも考えられる、との感想があった。発表者から、万葉歌人たちは植物の花をみてその美を直感的に捉えて詠みあげた、しかし梨の花の色はあまり美しいものではなく、その点若干の梨を詠んだ歌はあるが、やはりあまり好まれてはいなかったと考えるとの返答があった。

糸川光樹氏より、日本の植物はおうおうにして無常感と結びつくが、韓国の文学ではどのような形態となってあらわれているかとの質問があり、発表者から、時調を例にとっていえば、植物は無常感とあまり結びついて詠まれている訳ではないとの返答があった。

万葉集と時調植物の出現頻度表

	日 本 名	빈 도		韓 國 名	비 고
		(萬)	(時)		
1	akane	11		꼭 두 선 이	枕 言 葉
2	akinoka	1		松 나	
3	asagaho	5		나 팔 꽃	
4	ashibi	10		馬 醉 木	
5	asa	6	4	삼	
6	ashi	47	9	갈	葦 蘆
7	ahuchi	4		밀 구 술 나	葦 棟
8	ajisawi	2		수 나	
9	ichishi	1		매 죽 나	egomo木
10	ahuhi	1		아 욱	
11	abetachibana	1		香 櫻	kunenbo
12	ine	26	4	벼	
13	ihawizura	2		비 림	hiyu
14	unohana	23		병 꽃	卵 花
15	ayamegusa	12		창 포	
16	ukera	3	3	삼 주	
17	uhagi	2		숙 부 쟁	이
18	umara	2		질 배	꽃
19	ume	119	31	梅 花	
20	umo	1	1	토 란	
21	uri	1	7	외	꽃, 열매
22	ohowigusa	1		골 풀	燈 心 草
23	omohigusa	1		窩 生 植 物	nambangiseru
24	kakitsubata	7		붓 꽃	
25	katsura	3		楓 柱	(단 풍 총 칭)
26	kazunoki	1		倍 子 木	
27	katakago	1		가 계 무	릿
28	kahayanagi	4	2	움 버	들
29	kahobana	4	1	움 냇	꽃
30	karatachi	1		냉 자 나	무
31	kaherude	2		단 풍 나	무
32	karaawi	4		맨 드 라	미
33	kukumira	1		부 추	동
34	godo	1	17	벽 오	동
35	sa·ikashi	1		턴 英	
36	kuzu	17	4		
37	kuwa	2	5	침 나	무
38	kusokazura	1		봉 계	등
39	sanekazura	8		南 五 味	子
40	saha·araragi	1		골 등 골 나	무
41	kurenawi	23		홍	화
42	kuri	3			
43	konara	1		줄 참 나	무
44	konotegashiwa	2		촉 백 나	무
45	shikimi	1		붓 순	풀
46	komo	22		출 풀	蘆
47	sakikusa	2		지 닷 나	무
48	shidakusa	1		일 업	초
49	shihi	3			
50	shirikusa	1		三 稜	草
51	sakura	42	1	벚 나	무
52	sumire	2	4	계 비	꽃
53	taku	74		구 지 나	kozo

54	tahamizura	1		가		배	浮	萍
55	seri	2		미	나	리		
56	susuki	43		이	옥	새	芒	李
57	sumomo	1		오		얏	李	玉
58	tamabahagi	2		참	빛	자	茅	
59	chibana	27		며		풀	茅	花
60	tachibana	66	5		굴		故	紅
61	tade	3	7	여		귀		蓮
62	tsukikusa	7		달	개	비		
63	chichi	1		은		행		
64	tsuganoki	5		술	송	무	梅	
65	tsuchihari	1		익	모	초		
66	tsutsuji	10	5	칠		죽	杜	楸
67	tsubaki	9	2	동		백	杜	楸
68	tsuki	7	1	느	티	무	keyaki	
69	tsuta	8		마	삭	출	枕	言
70	tsurubami	6		도	토리	나		葉
71	nashi	3	14	배	나	무		
72	natsume	2	4	대		추		
73	nadeshiko	26	1	배	랑	이	撫	子
74	tsuzura	2		맹	맹	굴	(木)	防
75	tsumama	1		厚		朴		己
76	nubatama	62		범	부	채	枕	言
77	neckogusa	1		할	미	꽃		葉
78	tokorozura	2			마			
79	nagi	4		풀	달	개		
80	nebu	3		자	귀	나		
81	hagi	137	1	싸		리	(萩)	
82	hachisu	2	21		연			
83	nikogusa	4		공	작	사		
84	nunaha	1		순	교	리		
85	hanezu	4		옥		채		
86	hamayu	1		문	주	란		
87	hari	14		오	리	나		
88	haji	1		산	검	양		
89	hi·e	2	2	들	양	무		
90	hishi	2	6	마		피	菱	蘋
91	huji	21		등	나	름		
92	hikagekazura	1		석		무		
93	himeyuri	1		망	나	송		
94	hujibakama	7		골	등	리		
95	hoyo	1		겨	우	물		
96	hohogashiha	1				사		
97	hiru	1		달				
98	mame	1	6	새		패		
99	mayumi	7		진		풍		
100	matsu	71	80	소	나	궁	眞	弓
101	murasaki	15		겨		무		
102	mitsunagashiha	1				치		
103	mugura	4		가	시	랑	菰	
104	mugi	2	5	보		쿠		
105	momo	7	52	복	송	리		
106	yanagi	30	25	버		아	桃	
107	yamatachibana	2		자	금	들	楊	
108	momunire	1		느	름	우		柳
109	yama·awi	1		산	쪽	풀		
110	yamatazu	2						

補註1-3

111	yuri	10		산	나	리	百	合
112	yamabuki	17		황	거	메	山	吹
113	yuzuruha	2		글	리	나		
114	wasuregusa	4		원	추	리		
115	warabi	1	12	고	사	리		
116	ominaheshi	12		마	타	리		
117	ogi	3	1	물	타	새	荻	
118	yomogi	1	1		역	쑥		
119	wegu	2		울		메		
120	a·ona	1	1	열	우	우		
121	a·ha	5	4	서		속		
122	kimi	2		수		수		
123	ashitsuki	1	1				바다	김의 일종
124	nanoriso	13		모	자	반		
125	wakame	2	1	미		역		
126	miru	5		청		자		
127	nahanori	4	1	다	스	마		
128	ominoki	1	1	전	나	무		
129	sugi	11		삼	나	무	杉	
130	hi	8		회		목	檜	
131	muronogi	7		社		松		
132	kaniha	1					빛나무	(겉질)
133	chisa	1		상		치		
134	azusa	12					梓(枕言葉)	
135	e	1		팽	나	무	榎	
136	tsumi	3		산	뽕	나		
137	tsuge	4		회	양	목	黃	楊
138	hisagi	1		에	닥	나		
139	sakaki	1		빛	죽	이		(常綠수총칭)
140	ichihi	1		들	종	가		
141	kashi	2		복	가	시		
142	kashiha	1	1	떡	갈	나		(栢)
143	shirakashi	1		가	시	나		
144	nara	1		참		나		
145	hahaso	3		줄	참	나	konara	
146	hanakatsumi	1		줄		풀	makomo	
147	yamasuge	13		맥	문	동		
148	sasa	5		신	의	대		
149	take	14	40	대	나	무		
150	shinu	10		해	장	죽	(총	칭)
151	suzu	2		줄		풀	薦	
152	kahe	1		松		栢	총	칭
153	koke	8	6	청		대	총	칭
154	shiba	1		검		불		
155	suge	44		큰		솔	菅(총칭)	
156	mo	69				말	(총	칭)
157	momoyogusa	1						
158	mamegaki	3		고	양	니		
159	hamanasu	5		대	당	화		
160	zakuro	3		석		류		
161	kiku	26		국		화		
162	akaza	7		명	아	주	청	너
163	botan	6		모		란		
164	budo	4		포		도		
165	cha	1				차	茶	
166	hiruga·o	5		박	너	추		
167	ran	7		란		리	초	

補註1-4

168	yoshi	1	달	풀	갈	대
169	himawari	1	해	바라기		
170	kaki	1		감		
171	suika	4	수	박		
172	toka	2	동	아	冬	爪
173	mokuren	1	목	면		
174	watanohana	1	면	화		
175	anzu	5	살	구	杏	花
176	yamagoshou	1	조	피나		
177	horensou	1	시	금		
178	metakaraku	1	곤	달		
197	takayomogi	1	물	숙		
180	umagoyashi	1	거	여	甘	宿
181	inunazuna	1	꽃	다		
182	nigana	2	씀	바위	고	돌
183		1	잔	다		귀
184		1	취(유)			
185	yusura·ume	1	앵	도		
186	kirishimatsutsuji	1	영	산		
187	kaidou	1	아	그		
188	tsurigeninjin	1	더	덕		
189	popula	1	백	양		
190	azuki	1		팥		
191	shiba	1	금	잠		
192	komugi	1		밀		

			總 種 類	總 類 度	總 歌 數
萬	葉	集	175種	1,478	4,500
時		調	81種	565	2,400